

出水高等学校校歌作詞者 房内幸成氏について

校長 牛 垣 理

1 はじめに

校 歌	
	作詞 房内 幸成 作曲 岡田 忠彦
1. 春鳳の天がけり 島山高く水青き 不知火の海打ち越えて 万里はてなき海原に 浮かびてつひに隠れなば 若き心を誰か知る	3. かのバイカルの上高き 天門破り吹く風に 老松が枝の鳴る日には ひねもす旅を想へども 広瀬さやかに照る月の 淀まぬ水に澄む心
2. 山の彼方に幸ありと 希望の星の降りしより 夏の暁紫尾が峰に いさよう雲を恋ひくれば 大いなるかな天地は 遙かなるかなわが道は	4. 四方に周れる青山の 北の鎮めと秀でたる 矢筈の嶺に初雪の 降れるあしたも鶴が音の わたる夕べも止まらず 若やる胸の高鳴りは

上は昭和25年11月12日に制定された本校の校歌であり、この歌詞は万葉の香りがする、文語調のすばらしいものである。

私は平成13年4月1日に赴任し、初めてこの校歌に接した。その際、その格調高い調べに感動したのである。そして、この作詞者房内幸成氏がどんな人物か、どうしても知りたいという衝動に駆られた。同年6月頃、本校同窓会長 池田博芳氏、副会長 荒木愛博氏にこのことについてお聞きしたところ、本校卒業後、東大国文科を卒業されて群馬大学教授に就かれた立派な人物であることが分かった。しかしその時点では房内氏に関する文献も見つからず、それ以上のことは分からなかった。

また、ある時、本校1年生の男子生徒が校長室を訪れ、「校歌にでてくるバイカルとはどういう意味ですか」との質問があり、生徒は思いの外、校歌の歌詞をよく理解していないことに気付いた。校長として出水高等学校の校歌のすばらしさを生徒諸君に伝えたいと思い、そこで、校歌の作詞者の人となりが分かれば、校歌の意味を一層分かりやすく生徒に伝えることができるとの思いが強くなっていった。

そのような中で、本校教諭平田信義氏（本校昭和42年卒）の父君と房内氏が旧制出水中の同期の卒業という縁から、双方の親戚にあたる小笠原伸子さんが所有されている房内氏の遺歌文集『鳳凰』をお借りすることができた。さらに、本校60周年記念行事における房内氏の講演原稿が本校同窓会事務局長 宮

田俊一氏の御努力により見つかったことで、房内氏や校歌についての理解を深めることができた。ここにその一端を紹介する。

2 出水高等学校60周年記念事業における講演録から（昭和55年4月26日）抜粋要約

(1) 出水での幼少時代の生活

私自身は諸君と同じようにこの出水に生まれた人間であります。明治40年7月26日、当時、米の津村と言っておりました、米の津村の字、前田に生まれました。私の家が、今行きますと櫓木（ろぎ）と前田の中間に溜池（ためいけ）がありまして、その溜池の上にありましたが、物心ついたころから私はあの不知火の海を毎日見てまいりました。前面に笠山から蕨島・柱島ですかそれから伊唐島とか、その向こうに長島が見え、そして、一番北の方に獅子島がある。あの不知火の海の美しい光景を、毎日見ながら、私は自然の美しさに子供ながら感嘆し、我を忘れて見入っておりました。私が作り出した、この出水高校の校歌の中に「… 島山高く水青き不知火の海 …」とありますが、これは私が子供の頃から見ておった自然の美しい光景であります。

小学校に入る頃になりまして、大川内の上場に一家が移住しましたので、私は、上場から朝日小学校とって、今はありませんけれども、大川内でも分教場みたいな小さな小学校に入りました。一里と言いますが、つまり、4キロの山道を往復上り下りしまして、あの朝日小学校に通いました。同級生は男10人、女8人という、小さな組でして、そこで6年間学んだと言うよりは、遊んだ訳であります。私の小学校時代は勉強というのは授業の時だけで、授業以外は遊んでばかりいました。特に、往復2里もある山道ですから、遊ぶことは無数にあって、日が暮れる頃によく我が家にたどり着くというように、あの上場高原を、いわば放牧の子馬みたいに走り回ったり歩き回ったりして、自然に親しんだ訳であります。

上場高原というのは海拔6、7百メートルの雄大な高原で、その視野はすこぶる広大であります。東を望みますと、白鳥岳から韓国岳、高千穂の峯という霧島山が見えます。西南の方向は紫尾山がそびえ、また、真西には東シナ海の天草灘（あまくさなだ）が見えました。頼山陽が「雲か山か呉か越か。水天（ほうふつ）青一髪…」と歌った天草灘。それをいつも見はるかしておりました。そういうような環境に育ちましたから、私は自然に親しむという、自然の中で遊ぶという生活を7年間やりました。

小学校6年で出水中学校入学試験を受けたんですが、遊んでばかりいたせいか、落第したんですよ。それで仕方なしに高等1年間、本校の大川内尋常高等小学校に、往復四里（16キロ）の道を通いまして、またこれも遊んでばかりいましたけれども、最後には多少受験勉強らしいことをやりまして、2回生として出水中学校に入学致しました。そういうようなことで、私は、体の方では足・腰を非常に鍛えてもらって強くなった。それから、自然感情というもの、これを豊かに養うことができたということは将来の学問に非常に有益であったということ、今、顧みて痛感しております。

自然というものは、我々にとって親であり、また、神であるというような尊いものです。郷土出水の大自然が我々の生みの親・育ての親であったのであります。だから、その自然を学問研究の対象として研究することは更にまた意味深いこととなります。そういうようなことで、私の学者としての基礎がこの郷土、出水における少年時代の生活によって築かれたということは、今、顧みてまことに有難いことであつたと思っております。従って、「春鳳の天がけり、島山高く水青き、不知火の海打越え

て…」と、鳳凰が雄飛している光景を想像しながら、本校の校歌を作ることができたのであります。

(2) 旧制出水中での思い出（大正10年入学、大正14年卒、旧制出水中第2回卒業生）

私共が出水中学に入りました時は、校長はじめ大方の先生方は、東大の出身とか教育大学の出身の方々でありました。私共はそういう偉い先生方の御教育と御薫陶を頂きまして成長致しましたが、その間、初代校長の山口先生が第一高等学校・東大の出身者として、遠足の時など、一高の寮歌を我々に教えて下さって、その一高の寮歌を歌いながら、例えば、阿久根まで往復の徒歩旅行を致しました。

また、私が2年の始めの頃、英語の先生湛辰平（たたえたつへい）という教育大学出身の先生でありましたが、その先生が『学校の試験は終わった』というのを英語でどう言うか。」と、我々に尋ねられました。その時に、私が立ち上って、「The school examination is over.」と、即座に御答えしました。それを聞いて先生が、「ウーン、房内はsomethingになるぞ。」と、こうおっしゃいました。「something」というのは、「あるもの」という意味にもとれるのですけれども、よく調べてみますと、「相当なもの、大物」という様な意味のようです。

私共は、将来は旧制の高等学校に入り、そして、帝国大学へ進学するという志を立てておりましたから、3年に進みますと、もう、自分で受験勉強を始めておりました。その際に、先生方から補習教育などをして頂いたことは一遍もありません。自主独立で、自分の努力・勉強によって高等学校の入学試験に合格できる学力を養ったのであります。私共の同級生の中から4年修了のストレートで高等学校に入った者が五人も出たということは、出水中学校としては大変なことでありまして、七高に2人、五高に2人、それから三高に1人、私が高三に入ったのでありますが、私共は卒業しないで4年修了で高等学校へ入った訳であります。

(3) 旧制三高、東京帝国大学から旧制八高教授へ

私の入りました三高は、皆さん御承知のように日本における一高、三高という、その名は、天下に轟いておりました。三高は「自由」を校風としている高等学校で、私共は先生方から一人の人格を持った者として教育されました。その勉強はもう自由自在で、自分の力を養うために思う存分勉強しました。三高からはすばらしい学者が雲の如く輩出しております。ノーベル物理学賞をもらった湯川・朝永・江崎のこの3人の三高出身者の中の、湯川・朝永の両君は私の2年先輩でありました。もちろん、三高在学中はそういう先輩のことは何も知りませんでしたけれども、卒業後、彼等が世界的な学者となって名を現わしたということでもあります。私は東京帝国大学へ進学致しまして、ドイツ文学を専攻致しました。その時に、私はドイツ最大の偉人である、あのゲーテを自分の研究対象として選択致しました。ゲーテ研究を大学以来、卒業後も続けて十数年にわたって努力精進したのであります。

大学を卒業して後、昭和9年に第八高等学校（現・名古屋大）の教授となりまして、ドイツ語を講じたのでありますが、八高で私が教えた学生達が現在では日本の各界の第一線に進出して、目ざましい活躍をしております。

私自身は、丸7年八高におりまして、八高を止めてから東京へ出まして、文学者の仲間に入って文学活動を致しました。私の文学の仲間と言いますと、尾崎士郎、尾崎一雄・浅野晃・保田与重郎というような人達と「文芸日本」という雑誌によって文学活動を致しました。その、文学者としての活動は、日本とその運命を共に致しまして、戦後はもう情勢一変ということで、大分苦労しました。

(4) 群馬大学教授へ

私はついに、2度の教師に返り咲きまして、群馬大学の教授として赴任致しました。それ以来、25年、群馬大学の教授として努力精進してまいりました。私は自然が大好きで、上州に生活している20数年の間に、あの群馬県の、北関東の自然の美しさに強く惹かれまして、山登りをやりました。学生達を連れて、リュックサックを担いで、あの北関東の山々を登り下りしながら自然を研究致しました。その自然研究では、先ず植物の分布・分類、それに鳥類学、それから地質・地形の観察と、この三つの事を研究をしながら、山々を歩き回った訳です。そういう、文化方面の学問とは一見、何の係わりもないような自然の研究が、その後の新発見・新学説の基礎になろうとは、その頃は夢にも思っておりませんでした。中でも、鳥類学というものが、新しい学説の発見の一つの手段となった訳であります。鳥類学では、京都大学名誉教授の川村多美二先生に入門して、特に日本の鳥類の鳴き声の聴察に傾倒しました。

私の学問上の師はドイツのゲーテでありました。ゲーテという人は偉大なる詩人であるばかりでなく、自然研究者・自然科学者と言う一面を持っておりました。ゲーテは植物学・動物学・地質学・色彩学、それから気象学、そういう多方面の自然研究において功績を挙げております。従って、ゲーテは単に詩人であるばかりでなく、大自然の色々な領域を深く探求しましたから、その精神のスケールの大きいことは、ユニバーサル、ミクロコスモス（小宇宙）と言われる位の偉人になったのであります。私は生まれつき自然が大好きでありまして、自然に心を傾けておりましたから、ゲーテと同じような方向に進んだのでありましようが、その自然研究の面におけるゲーテの新発見を詳しく調べました。そういうことで、私もゲーテにならって自然研究を二十数年続けながら、世界の言語・宗教・歴史・文化・文明の研究において、新学説を打ち立てることができたということは、非常に有難いことと思っております。

3 遺歌文集『鳳凰』から（平成8年9月15日発行）抜粋要約

(1) 当時の同僚群馬大学教授有川美亀男氏の回想

房内幸成先生が前橋へ赴任して来られたのは昭和25年の夏のことであった。当時はまさに、国破れて山河ありそのものの情景で、前橋の街にも戦災の傷痕がなまなましく残り、焼跡のバラックの北には赤城山の傾斜が痛々しいまでに澄んでいた。

群馬大学学芸学部—のちの教育学部—は今の県民会館のあたりにあったのだが、その建物のあわれさは言語に絶するもので、構内の空地には、よもぎやあかぎの類が繁茂し、夕立の後などにはその上に、まぶしいばかりの入道雲を湧きのぼらせていた。

房内先生の研究室は粗末な木造建築物の2階にあり、しばらくは2、3人のドイツ語の先生が一室に雑居していた。私たちの研究室とすぐ近くであり、共に語学文学にたずさわる仲間同士なので、両研究室の交流は親しく、何かと話し合う機会に恵まれていた。

先生は戦前、旧制第八高等学校のドイツ語の教授として、全国から名古屋に集まった俊才を教えた過去を持っておられた。戦後、荒廃した上州に移り、混乱期の若者たちに、第2外国語的な扱いを受けていたドイツ語の初歩を講じることは、むなしい限りであったと推測される。そのためか教室では、講義が横道にそれて「萬葉集」の講義となるが多かったらしい。事実、私に対する先生の話は「萬葉集」をはじめとする和歌文学全般、また古典的な文化、ゲーテの世界などで、興味津々、青年そのものの情熱をこめたものであった。私はこの8歳年上の、同学の先輩から何単位分の講義を受けたこと

になるか、とにかく、あの飢餓と虚脱の時代における楽しく貴重な時間であったことを感謝している。

房内先生は歌人としては三井甲之（こうし・明治16～昭和28）の門に学ばれた。この歌人は正岡子規の根岸短歌会を出発点とし、伊藤左千夫の信頼も深かったが、左千夫の芸術性尊重の思想と相いれない人生主義の所有者であったため、ついに反「アララギ」の道を進んだ人で、斎藤茂吉らとのほげしい論争は有名である。

歌人としての房内先生の軌跡には、かなり明瞭な形で三井甲之が投影していると思うが、ただ単純な、受身的なものではない。先生は師説を継承しながら、そこに個性的な世界観を重ね、新しい時代へ向けての文学、文化探求の道を開いてゆこうと務められたのである。先生は物心両面において疲弊の極にあった戦後の混乱状態を、あからさまに悲憤慷慨するよりも、超然として未来に大きな夢をいだけることが多かった。先生も戦時中から戦後にかけて、現実的には苦しみの多い道を歩んで来られたことと思うが、ゆくりなくも上州の地に落ちつき、まず心を慰められたのは、この地の豊かで清らかな自然であったと思う。

先生の歌の特徴は質実雄大な「萬葉集」のしらべを基調とし、ときにはそこに新古今的な、あるいは現代人的な繊細な発想の加わった、抒情の美にあると思う。素材的には、夢の世界をも加えた心境詠、人間関係、植物等を中心にした自然詠等で、さほど広くはないが、これは先生がアララギ風の写実や具象的な描写のかわりに、つねに全人的な感情の吐露を先立てられた結果であろう。私はこういう歌に、先生の、俗界のけがれや歌壇の動向などから離れた、清澄な孤高の世界を感じ、羨しく、また貴重なものと思っている。

先生はやがて、大学構内の住宅から、利根川左岸の無人の森林の中に居を移された。今でこそ住宅地となってしまったが、当時は樹々のそよぎと小鳥の声だけの静寂に充ち、先生の学問思索のためには絶好の天地であった。また当時、小鳥の方言をさえ聴き分けるという大先生が関西から来られたが、赤城山頂の探鳥会が催され、房内先生も参加された。

これがきっかけとなったかどうかははっきりしないが、この頃から先生の鳥類観が徐々に深まりはじめ、ついに鳥類の生態を核とした言語、および人類文化の起源に関する斬新雄大な学説を展開されるに至ったのである。

(2) 父の思いで（御令息房内幸博氏）

父が78歳で死んで早や10年。生前、おれは95まで生きるんだと豪語していた父が癌と診断されて三年後でした。その後、「歌集を早く出さなければ…」と毎日のように話していた母も、父が死んで5年後、私（幸博）にそれを託して亡くなりました。それから4年半、ようやくここに父の歌集が刊行される運びとなりました。これ程時間がかかったのは全く私の怠慢のせいでもあります。刊行までの間、有川美亀男先生（群馬大名誉教授）、村上清先生（東京理科大名誉教授）、高橋誠一先生（元高崎女子高教諭・歌誌「草炎」主宰）の諸先生方には、お忙しい中にも関わらず、父主宰の歌誌「白日」からの選歌、心温まる序文、激励の御言葉、数々の助言等を賜り、ここに厚く御礼申し上げます。

父、房内幸成は明治40年7月、鶴の渡来地として有名な鹿児島県出水市にほど近い上場（うわば）という標高数百米の山村に産声を上げ、旧制出水中学を卒業するまでこの地で過ごしました。父が自然をこよなく愛したのは、この頃の生育環境が大きく影響しているものと思われまふ。私達子供達の小さい頃、夕食時、晩酌でほろ酔い気分になると幼い頃の自然と戯れた思い出を楽しそうに語ってくれたものです。

出水中学卒業後は、鹿児島を離れ、京都の第三高等学校に入学（大正14年）、3年間の学生生活を謳歌しました。この京都の学生生活も思い出深かったと見えて、酒が入ると「紅もゆる丘の上…」と寮歌を独特の銘調子で歌ったものです。中でも学生の街として京都が最期まで懐かしかったらしく、癌の手術で入院中も、三高で数年先輩であった梶井基次郎の「樺櫨（れもん）」の文庫本を何度となく読み返していたのが思い出されます。三高卒業後、東京帝国大学文学部（独文科）に入学（昭和3年）、ドイツ文学、特にゲーテ研究に没頭したそうです。なぜ独文科を志望したかは判りませんが、私の推測では、英文科ではありふれている、位の単純な動機だったのだらうと思います。その証拠に大学の3年間の後はそれほど独文学に傾注することはなかったようです。

昭和6年に大学を卒業しましたが、当時は世界恐慌のさ中であつたためすぐには良い就職口が見つからなかったらしく、中学校の英語の教師を3年程やった後、名古屋の第八高等学校（現名古屋大学教養部）の教授になりました。この時の教え子の中にソニーの故盛田会長、前川正前群馬大学長、岩井浩一群馬大学名誉教授、故鶴谷孔明群馬県医師会長など経済界、医学界、その他の著名人が数多くいることを自慢げに話していたのを思い出します。

昭和15年先妻ミチと死別（17年、私の母であるヨシと再婚）。昭和16年、第八高等学校（現名古屋大学）を依頼退職して、文筆活動に専念するようになりました。年上の兄姉の話では、当時（昭和17～19年）東京の電車内の文芸春秋や、講談社の広告に父の名がしばしば出ていて子供心に誇らしく思ったそうです。また、この頃、今東光、尾崎士郎、吉川英治、海音寺潮五郎、小山寛二の各氏と親交を結び、よく一緒に講演旅行をして回ったそうです。

そして終戦後は、世の中の流れも変わり、それまでの評論活動ができなくなったためか、「阿蘇峰男」というペンネームで話らない小説を書いては当時の苦しい生活を凌いでいたと母から聞いております。この頃は父にとって最も不遇な時代であったためか、自慢話の好きな父本人からはこの頃の話を書くことはありませんでした。

その後、とうとう文筆ではやっていけなくなった父は、群馬大学教授として上州の地に赴き、学生にドイツ語を教えるようになりました。昭和36年、前橋市の敷島公園にほど近い雑木林の中に居を構え、「聴鳥草堂」と名付けて78歳で死ぬまでここに住み続けました。群馬の自然を愛し、夏には群馬大学の学生と一緒に上越国境の山々によく行ったものです。末っ子の私も小学、中学生の頃は赤城、榛名はもとより尾瀬などにも何度も連れていってもらったものです。中でも、県立松井田高校の方々と利根川を溯りその源流（大利根岳）を究め、越後の六日町に下って来た時のことなどは忘れられない思い出です。

父は自然を愛し、中でも野鳥の鳴き声と、植物には造詣が深く、まさに植物図鑑や鳥類図鑑と一緒に山歩きをしているようでした。後年、父が「人は鳥から言葉を教えられた…」とする「言語の起源論」を考え出したのも恐らくここからきているのだと思います。本歌集のかなりの部分を占める父主宰の歌誌「白日」にも自然を慈しむ心がよく表れているように思います。

父は元々大学教授などより、自由な文筆家タイプのためか経済観念に疎く、金銭的に母に苦勞をかけたにもかかわらず、母を愚妻よばわりしていたのが幼い頃の私には嫌でした。今になって思えば、口では何と言っても本当は母への情愛は深かったのだと思います。父の人となりについては未熟な私などには到底はかり知れなかったということを今回、「白日」を全号読み通してみても初めて悟った次第です。文字通り愚息の私がただだと父について書くよりも、是非、本歌集に収められた歌から父の人柄を忍んで戴ければと思う次第です。

4 房内幸成氏の歌の紹介（故郷出水を詠んだ歌、遺歌文集『鳳凰』より）

不知火の海べ時雨れてふるさとの
紫尾の高嶺に初雪のふる

廣瀬川やまず流れてささ波は
春の光にい照りかがよふ

ふるさとの矢筈の山の裾遠く
島のかこめる不知火の海
（矢筈山 肥薩の国境にあり、世に出
水富士といふ）

春の日のうららかに照れる國原の
空のどかにも鶴のわたれる

廣瀬川夕波寒く吹く風に
い向ひのぼる鳩の夫婦かも

紫尾が嶺のそとにも雪は残れども
春の日照り出水の里は

加紫久利の宮のみ前の老松の
梢に高く百舌鳥の鳴く
（加紫久利の宮 出水市米ノ津町に
あり、延喜式内にある薩摩二社の一）

紫尾が嶺もみ笠の山も見えぬまで
わがふるさとに沫雪のふる

天の門に起これる風は月を吹き
海原こえて秋山に鳴る

春の雪ふれる朝ぞいざ子ども
疾く起き出てなりはひをせむ

5 結び

「春鳳の天がけり 島山高く水青き 不知火の海打越えて …」は、房内先生が幼少時代を過ごした米ノ津の前田や上場高原から毎日見ていた原風景だったのである。

本校校歌は、出水平野へ飛来、越冬し、そして北帰行する鶴の気持ちに、若者の夢と希望を託した抒情詩であるといえよう。そこには、房内先生を育んだ郷土出水の自然と文学者としての房内氏の人となりが投影されていることを十分理解していただけたのではないだろうか。

遺歌文集『鳳凰』に収められている房内先生の歌は、横溢する詩魂と、高邁なる精神に裏打ちされた格調の高いものである。その生涯をかけて言葉の道を究め、歌に情熱を傾けられた房内先生は、天上にあって、今も朗々とその歌を詠み続けておられることであろう。

私たちは本校出身の偉大な文学者によって作詞された校歌をもって幸せに思う。平成14年12月24日の2学期終業式で、房内先生の人となり校歌の意味を生徒に話したところ、生徒も、初めて聞く話で、心の琴線を揺さぶられたように感じた。今後とも先生方が機会あるごとに話されれば幸いと思い、ここに文献に基づき記すこととした。

【参 考】

1 校歌歌詞の説明

1 春

春の季節を迎えると鳳（鶴）が北方を目指して飛んで去って行く。島々が海上に高く姿を現している、青々とした不知火の海を、鶴は越えて、はてしなく続く海原に姿を現し、やがてその姿を消してゆく。はてしない旅を続けて行く鶴、この鶴の旅にも似た、未知に満ちた自分の若々しい人生の旅という夢を、自分以外に誰が知ることができるだろうか。恐らく誰も知ることはできないだろう。

2 夏

山の彼方には幸せが住んでいるという（カール・ブッセの詩）。その幸せを象徴するかのような希望の星が瞬いて以来、夏の明け方紫尾の峰にかかる雲を私は恋しく思ってきた。自分と同じように、北の地の鶴もさぞかしこの出水の地を懐かしく恋慕って、胸を躍らせているだろう。鶴の飛来してくるこの天地は果てしなく広い。私の進むべき人生の道もまた遥かに続いている。

3 秋

かの有名なバイカル湖の上を、今頃は冷たい風が吹き渡っているだろう。
天に続くとかいう門を破らばかりの烈風に、老松の枝が鳴る日々。私はかの鶴と同じく辛い長い人生の旅を終日あれこれと思ひ浮かべる。しかし、不思議なことに広瀬川を明るく照らす月のように、淀むことなく流れる川を前にして私の心はますます澄んでゆく。
間もなく訪れる鶴の幸い旅を思えば、私のこれからの人生の旅はなにほどのこともない。

4 冬

東西南北四方に位置している青々とした山々、その山々の中にこの地を鎮め護るかのように北にそびえ立つ矢筈の嶺がある。

その嶺に初雪の降っている朝も夕べも、北方から飛来した鶴の鳴き声は止まらない。ちょうど、その鳴き声と同じように、未来への夢に躍る私の若々しい胸の高鳴りは、いつまでも止むことがない。

(本校 国語科 窪田皓一郎教諭による)

2 著者の年譜

明治40年 7月26日	鹿児島県出水郡にて房内喜造、マキの次男として生まれる
大正14年	鹿児島県立出水中学校卒業
昭和3年	第三高等学校卒業 東京帝国大学文学部独逸文学科入学
昭和4年12月	山口ミチと結婚
昭和5年3月	長女 玲子誕生
昭和6年3月	東京帝国大学文学部卒業 研究テーマ「ゲーテ」
4月	日本大学附属第二中学校教諭
昭和8年2月	長男 日出夫誕生
昭和10年4月	第八高等学校教授
5月	次男 龍成誕生
昭和12年6月	次女 ゆりえ誕生
昭和14年	名古屋帝国大学臨時附属医学専門部講師
昭和15年1月	三女 直子誕生
8月	妻ミチ 病にて死亡
昭和16年	名古屋帝国大学を依願免官、子供五人を妻ミチの実家(山口家)にあずけ、単身で上京。このころ文芸春秋、講談社等に評論等を発表。今東光氏、尾崎士郎氏、吉川英治氏、海音寺潮五郎氏、小山寛二氏らと交友を結ぶ
昭和17年3月	佐々木ヨシと結婚。
昭和18年8月	三男 稜威雄誕生
昭和19年5月	長女玲子、次男龍成、次女ゆりえ鹿児島県出水へ疎開、長男日出夫、東北方面へ学童疎開。
昭和20年	強制疎開で家族が出水へ移り、著者のみ東京に残る
8月	終戦 家族全員出水で暮らす
昭和22年1月	四女 さゆり誕生、著者のみ単身上京
昭和20年4月	四男 幸博誕生
8月	一家で上京、松戸市馬橋に住む
昭和25年8月	群馬大学群馬師範学校教授
昭和26年3月	群馬大学学芸学部教授
昭和27年	歌誌「白日」創刊
昭和40年4月	群馬大学教養部長
昭和48年4月	群馬大学を定年退職 群馬大学名誉教授
4月	長岡技術科学大学工学部教授
11月	勲三等旭日中綬章を受ける
昭和57年3月	長岡技術科学大学を退官
昭和61年3月16日	病にて死去